

甲斐と萬葉集(五)

— 『身延鑑』 記載の俊成・定家両筆万葉集をめぐる —

Kai and Man'yōshū (5) : On Man'yōshū Written
by Shunzei and Teika, Which is Recorded in Minobukagami

鈴木武晴

SUZUKI Takeharu

一序

藤原定家が鎌倉幕府第三代将軍源実朝に献上した萬葉集、その系譜に立つのが廣瀬本萬葉集である。

廣瀬本萬葉集の底本は、甲斐の国の春日(加藤)翼が所蔵していたと推断され、翼の子の春日昌預をその書写校合の統括責任者として、廣瀬本が誕生したのである。〔拙稿「甲斐と萬葉集(一)・(二)・(三)・(四)、都留文科大学研究紀要第57・58・59・62集、二〇〇二年十月・二〇〇三年三月・同十一月・二〇〇五年十月発行」〕。

甲斐の国には、廣瀬本萬葉集とその底本の他に、藤原俊成と定家の父子の筆になる萬葉集が存在したことが、『身延鑑』の上巻に記載されている。

『身延鑑』は、貞享二年(一六八五)身延三十一世一円院日脱上人が、日蓮宗総本山としての身延山(久遠寺)の由来を後世に伝え、かつ参詣者を案内するために編集したもので、江戸中期の身延山の姿を知ることができる貴重な書籍である。

まずは、その『身延鑑』の当該箇所を、前後の記述とともに確認しておこう(『身延鑑』の本文は、藤井日光編著『新訂身延鑑』へ身延山久遠寺、平成十三年二月十六日発行)所収の宝曆十二年刊文化十四年修印本の影印に拠り、適宜句読点をうつ。以下同様。)

ひがしの靈藏には後醍醐天皇伏見院の御震筆、後陽成院の御震筆のほつけ廿八品の御製、後光明院御震筆の首題、宮御門跡撰家清花衆百人自詠自筆の一色のたんざく百枚、俊成卿定家卿親子両筆の万葉集一部、定家卿の短冊、為家の古今集、ためすけ

卿の源氏物語壹部、阿仏尼哥抄、左大臣道家公の朗詠集、佐理行成道風の墨跡、王羲之が大字の赤壁賦八まひ、子昂が証道歌、(後略) (傍線は本稿者。本文中の「御震筆」の「震」の字は「宸」の誤まりと認められる)

考察対象の「俊成卿定家卿親子両筆の万葉集一部」(小稿では以下略して「俊成・定家両筆万葉集」と呼ぶ。なお、「一部」は巻一〜巻二十の歌を収めた全本一部の意であろう)は、現在所在不明。けれども、『身延鑑』の如上の箇所に記載されているだけでも、極めて貴重なことである。なぜなら、この記載は、日本文学史上今まで知られていない重要なことを語り告げるからである。以下、小稿はそのことを具述する。

二 俊成・定家両筆万葉集と阿仏尼と日蓮

本論に入る前に、念のため、俊成・定家両筆万葉集が廣瀬本萬葉集の形成に直接関わった可能性があるか否か、検討しておきたい。

俊成・定家両筆万葉集は、文字どおり俊成・定家の二人の筆になる。一方、廣瀬本萬葉集は、巻二十の尾題の後に、次のような識語と藤原定家の署名・花押がある。

校合秘本直付和字訖

至于不和長哥欵依老眼疲委不見之
重々可見合之

参議侍從兼伊豫權守藤花押

識語の内容は次のとおり(「廣瀬本萬葉集解説」『校本萬葉集十八
新增補 追補』)。

一、秘本に校合を加え、漢字本文に相応する訓を記入する作業が完了した。

二、長歌には訓が附かないままに終ったものもあるかと思う。

三、老が加わり、視力もとみに減退しておぼつかないが、今後更に比較を重ねていきたい。

してみると、廣瀬本萬葉集は、定家一人の筆になる本の系統本の書写本と捉えるのが自然である。よって、俊成・定家両筆万葉集が廣瀬本萬葉集の形成に直接関わった可能性はないと考えられる。

では、俊成・定家両筆万葉集は、どのようにして甲斐の国身延山久遠寺に伝えられたのか。

この難問を解く鍵は、『身延鑑』の先掲記述の中にある。目をひくのは、当面の俊成・定家両筆万葉集に続けて、「定家卿の短冊」
「為家の古今集」「ためすけ卿の源氏物語壹部」「阿仏尼哥抄」とあり、俊成・定家・為家・為相(為家と阿仏尼の子)・阿仏尼といった同じ歌道家の系譜に立つ人々の貴重な書写本や詠歌が挙げられていることである。

このことは、いったい何をあらわすのか。

思うに、このことは、如上の人物の中にこれらの典籍・和歌を所持し、身延山の日蓮に伝え渡した人物がいることを告げているのではないか。

そうとすれば、その人物は誰か。

それは、ずばり言つて、阿仏尼であろう。

そう考えることの徴証が、『身延鑑』の中巻にある。

又、問はく。元祖身延にて三首の和哥とは、いつれの哥にて候や。

老僧の曰。大聖人は阿佛に哥の伝受ましくて、法師の哥のやうにもあらずとこそ書のせ給ふ。身延の三首と申すは、

終ついにしやうぜうをもつてせず不レ以テ小乗一 濟下度しゆじやうのをさいでず於衆生上

心の心を

芦の葉のかたちは船に似たれども

難波の人を得こそわたさね

悪鬼入あくきそのみにいり其身ニ罵詈毀マカシ辱セン我ワの心を

おのづから邪に降る雨ハあらじ

風こそ夜の窓をうつらめ

如かぜの下ノ風ノ於くうちうにおいて空中ニ一切無障礙いっさいのせうげなきがごとくならん上

の心を

たちわたる身のうき雲も晴ぬべし

たへの御教の驚の山風

『身延鑑』（昭和四十一年十一月二十四日、身延山久遠寺発行）には、先掲「阿仏尼哥抄」の「阿仏尼」と右掲「身延の三首」とに、

同様の注を施し、『録内扶老』の記述を紹介している（先掲『新訂身延鑑』も同じ）。

『録内扶老』は、日蓮聖人遺文の録内御書一三四鈔についての注釈書で、禅智院日好（一六五五—一七三四）の撰。享保十三年（一七二八）に成立したもので、全十五卷（『日蓮宗事典』）。

今、明治四十四年六月一日・日蓮宗全書出版会発行の『録内扶老』^③によって当該記述の本文を掲げよう。

暹師（和語雑抄首書）云雲玉集云日蓮上人ハ冷泉ノ母阿佛ニミヘ古今ナドモ伝受アルニヤ法師ノ哥ノヤフニモナク悪鬼入其身ノ意ヲノツカラヨコシマニフル雨ハアラシ風コソ夜ノマトヲウチケレ是レ風雨ノウハサラ面白ク詠テ又経文ニモ叶也上（卷十「身延山御書」、傍線は本稿者。「暹師」とは、日蓮へ一五八六—一六四六のこと）

また、『日蓮聖人絵伝』（昭和四十八年十一月三日、身延山久遠寺発行）には、『本化別頭佛祖統紀』に拠つて、宝治二年（一二四八）日蓮二十七歳の時に「冷泉為家に歌道及び書道を学ぶ。」と記している。

『本化別頭佛祖統紀』は、六牙院日潮（一六七四—一七四八）の著。日蓮の四五〇年遠忌を期して、一七三一年（享保十六）に脱稿したもの。日蓮・六老僧（日蓮の本弟子六人）・諸山の先師について列伝体の形式で鑽仰的に述べた日蓮教団史上最初の宗門史書である（小学館『佛教大事典』など）。

今、昭和四十八年十一月一日・本山本満寺発行の『本化別頭佛祖

統紀』に拠って、当該箇所を確認しておきたい。

寶治二年戊申高祖二十七（中略）又謁藤、為家卿受和歌之道。檜葉之古風素驚之正道一タレ聞誦徹。為家大駭倒底テ完付ス。兼學筆道書法絕妙也。振古有道風空海佐理行成之四家。高祖ノ書法過タリ之ニ。為家見而優賞家藏秘軸手カラ出レ之ヲ書セシム之カ外ヲ籤ヲ。高祖不辭セ。為家大悦シ焉。

如上の『録内扶老』と『本化別頭佛祖統紀』の記述は、日蓮が冷泉家と関わり、為家から和歌と書道を学び、その妻阿仏尼から和歌を学んだと伝えているのである。何もないところからこのような伝えが生まれるはずはなく、信憑性の極めて高い記述と思われる。

日蓮は建長五年（一二五三）三十二歳の時に立教開宗。それ以前の修業の時期に（具体的には宝治二年（一二四八）に、京の冷泉家と縁があつて為家から和歌の道と書道とを学んだ。そして、その後も特に東国鎌倉に下向した阿仏尼とは心の交流を持ち得たのだと考えられる。先掲の『身延鑑』中巻や『録内扶老』巻十一「身延山御書」に見る、和歌を通しての日蓮と阿仏尼の心の交流の記述は、まさにそのことを物語っていると捉えられよう。

考察対象の俊成・定家両筆万葉集も、阿仏尼が直接所持していたものと推定される。そして後に、日蓮のもとに渡されたものと考えられるのである（渡された事情とその時期については後述）。

本稿者がこのように考える根拠は、阿仏尼の鎌倉下向とそれに基づく『十六夜日記』にある。

阿仏尼は、亡夫藤原為家の遺産である播磨の国細川の庄の相続争

いの裁定を鎌倉幕府に仰ぐため、遠路東国の鎌倉に下向した。その時に持参したのが、先掲の「俊成・定家両筆万葉集一部」と「定家卿の短冊」「為家の古今集」「ためすけ卿の源氏物語壹部」に「阿仏尼歌抄」（阿仏尼自選の歌々か）であつたと考えられるのである。⁴

では、なぜこれら冷泉家の至宝を持参したのか。それは、これらの典籍や和歌によつて阿仏尼がおのが身分を鎌倉幕府に証明するためであつたと考えられる。事が相続争いだけに、鎌倉幕府に裁定を仰ぐ上で阿仏尼自身の身分を証明するものが必要であり、如上の典籍と和歌がその役割を担つたものと察せられるのである。ことに、俊成・定家両筆万葉集は、阿仏尼の身分証明に最も有効なものであつただろう。なぜなら、かつて定家が鎌倉幕府第三代将軍源実朝に定家自筆の萬葉集を献じていたからである。阿仏尼はそのことを十分に心得ていたであろう。

如上の典籍・和歌は阿仏尼の身分証明書であつたと考えられるけれども、俊成・定家という祖に亡夫為家、そして都の愛し子為相をしのぶすがの品でもあり、鎌倉へ向かつて異郷の地を旅している時も、異郷鎌倉に滞在している時も、阿仏尼の心を慰めるものでもあつたと思われる。

阿仏尼の心を慰めるものとして、法華経も重要である。『十六夜日記』には法華経への帰依が次のように綴られている（『十六夜日記』の本文及び現代語訳は、森本元子全訳注の講談社学術文庫『十六夜日記・夜の鶴』の『十六夜日記』に拠る）。

弥生やよひの末つかた、わかわかしきわらは病まみにや、日まぜにおこること、ふたたびになりぬ。あやしう、惚ほれはてたるここと

しながら、三たびになるべき暁より起きあて、仏の御前にて、心を一つにして、法華經を誦みつ。

阿仏尼は弘安三年（一二八〇）の春弥生の末ごろ、鎌倉で「わらわ病み」（一種の熱病）にかかり、仏前で心を一つにして法華經を誦んだ。その甲斐あつて、病は癒える。その時の心境を都の権中納言の君（藤原為教女）への文に、次のように記している。

旅の空にて、あやふきほどの心細さも、さすがに保つ御法のしるしにや、けふまではかけとどめて

（旅先で病にかかり、どうなることかと心配でしたが、さすがに信仰する仏法のご靈験ですか、今日まで命をとりとめることができました）

これを承けて権中納言の君は、次のような歌で答えている。

たのもしな身にそふ友となりにけり妙なる法の花の契りは

（なんと頼もしいことでしょう、『法華經』が衆生を救おうとのご主旨は、あなたの身を離れぬ友ともなったのですよ。）

こうして、阿仏尼が法華經を信仰していたことが知られるのである。阿仏尼は訴訟の裁決の下らぬ状況のやるせない鎌倉での歳月を、法華經を心の友として過ごしていたのである。

このことから、法華經の教えに立って日蓮宗を開いた日蓮との心のつながりが見えてくるのである。

日蓮二十七歳の時に京において生まれた、日蓮と冷泉家との縁は、東国における日蓮と阿仏尼との法華經を介しての心のつながりをもとに育まれ、深まっていったものと察せられる。

阿仏尼は鎌倉の「月影の谷」という所に住んだ。『十六夜日記』には、

東にて住む所は、月影の谷とぞいふなる。浦近き山もとにて、風いとあらし。山寺のかたはらなれば、のどかに、すぐくて、浪の音、松風たえず。

と記されている。現在、極楽寺字月影谷入口の電車踏切際に、「阿佛邸舊蹟」の石碑がものさびしげに立っている。

一方、日蓮ゆかりの常栄寺の北側の地も、阿仏尼の屋敷跡とされる。この常栄寺のすぐ近くには日蓮宗妙本寺があり、この地域一帯は日蓮宗の地域と見られる。阿仏尼は当初は月影の谷に住んでいたが、後に居を日蓮宗の地に移したのである。とすると、このことも日蓮と阿仏尼との心のつながりを告げる。

日蓮が鎌倉を去り甲斐の国の身延山に入ったのは、文永十一年（一二七四）の五月十七日のこと。阿仏尼が鎌倉に下向した時には、日蓮は身延山にあったと覚しい。けれども、文によって心の交流をもったと思われる。また、当時、鎌倉と甲斐とを結ぶ道として鎌倉街道があり、駿河を経由して身延山に入る河内路もあった。阿仏尼と日蓮が東国で会った可能性もある。先掲『身延鑑』の「大聖人は阿佛に哥の伝受ましく、法師の哥のやうにもあらずとこそ書かせ給ふ。」や、『録内扶老』の「日蓮上人、冷泉ノ母阿佛ニミヘ古今ナ

「ドモ伝受アルニヤ」の記述は、叙上の東国における日蓮と阿仏尼の交流を物語っていると考えられるのである。

二人の心の交流は、日蓮が入滅した弘安五年（一二八二）まで続いたことであろう。

翌弘安六年（一二八三）、入滅した日蓮を慕うかのように阿仏尼もこの世を去った。言われているように鎌倉で亡くなったのである。鎌倉幕府の裁決を見ぬままの異郷鎌倉での死は、さぞかし無念であったと思われる。けれども、その亡きからは、帰依する法華経の信徒たち、すなわち心の交流をもった日蓮の、鎌倉の弟子たちによって手厚く葬られ、供養されたことであろう（現在、源氏山の麓に阿仏尼の墓と伝えられる墓がある。ただし、それが本当に阿仏尼の墓であるかは確証を得ない）。

三 俊成・定家両筆万葉集、甲斐身延山へ

以上の考察に連動して、一つの重要な問いが浮上する。それは、阿仏尼が所持していたと覚しい俊成・定家両筆万葉集以下の冷泉家の貴重な典籍や和歌が、身延山久遠寺に渡ったのはいつかという問いである。

この答えとして、①日蓮と阿仏尼がこの世に在った時、②日蓮と阿仏尼の逝去後という二つの見方ができるであろう。

先述したように、俊成・定家両筆万葉集以下の典籍や和歌は、鎌倉幕府に対しての阿仏尼の身分証明の役割を担っていたと察せられる。これらの典籍・和歌が阿仏尼の身を離れるということとは、もはやその効力がなくなつたことを物語る。案ずるに、阿仏尼は、数年

経つても鎌倉幕府の裁定が下らぬ状況の中で、大切に所持する俊成・定家両筆万葉集以下の冷泉家の至宝を、心から信頼できる人物日蓮にあずけたものと考えられる。甲斐身延山は戦乱の及ばない聖なる地である。冷泉家の至宝をあずけ、守り伝えてもらうには最適な地でもある。このように考えるならば、事は日蓮と阿仏尼の生前のことになる。その蓋然性がきわめて高い。仮に、日蓮と阿仏尼の亡き後のことであっても、阿仏尼の遺言または阿仏尼の日蓮への信頼の心を知る日蓮の弟子によって、日蓮開山の身延山久遠寺にあずけられたと考えることができる。

こうして、身延山久遠寺に俊成・定家両筆万葉集以下の冷泉家の至宝が伝わり渡り、『身延鑑』に記載されることになったのである。その記述は、日本文学史上、未知であった阿仏尼の晩年の心境と、日蓮との心の交流とを物語る貴重な記述と言えるのである。

（二〇〇五年〈平成十七年〉九月二十七日）

注

（1）『身延鑑』については、二〇〇三年（平成十五年）十月十九日に、身延山大学図書館の優秀な司書である沼田晃佑氏より詳しくご教示を賜わった。改めてここに記し、深く感謝申しあげる。

（2）しかしながら、俊成・定家両筆万葉集は、源実朝に献上された定家本萬葉集の基になった本であったと稿者を見る。それは、廣瀬本萬葉集の形成に到る一系譜の祖本ともいうべききわめて重要な写本であったと位置づけられよう。

（3）『録内扶老』と後掲の『本化別頭佛祖統紀』の活字本については、身延山大学図書館の佐藤英煌氏にご教示を賜わり、閲覧さ

せていただいた。記して感謝申しあげる。

(4) 少なくとも、この五点が挙げられる。為家と書道の関わりを思えば、「佐理行成道風の墨跡、王羲之が大文字の赤壁賦八まひ」なども、阿仏尼が所持していた可能性なきにしもあらず。

五点のうち、「為家の古今集」は、定家本古今集を子の為家が書写して成した本と考えられる。また、「ためすけ卿の源氏物語老部」は、母阿仏尼の書写した『源氏物語』の書写本と推考される。阿仏尼は、為家のむすめの後嵯峨院の大納言典侍（だいなごんのすけ）に招かれ、『源氏物語』を書写している。